

令和 5 年 4 月 22 日現在

機関番号：32641

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2022

課題番号：19K23022

研究課題名（和文）19世紀フランスにおける大聖堂の表象研究 旅のテキストとイメージの考察を中心に

研究課題名（英文）Representation of Cathedrals in 19th Century France: Reflections on text and image in travel

研究代表者

泉 美知子（IZUMI, Michiko）

中央大学・文学部・准教授

研究者番号：00742983

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「大聖堂」に注がれた19世紀から20世紀初頭までの眼差しの諸相を問題とする。ヨーロッパでは「旅」は芸術作品の鑑賞体験と深く結びついてきた。「大聖堂」の価値が旅での眼差しを通してどのように見出され、当時の社会の文脈にどのように関連づけられるのかについて、テキストとイメージの分析から明らかにする。分析の対象としたのは、ピクチャレスク・ツアーからツーリズムへの過渡期における、イギリスの美術批評家ジョン・ラスキンと、ラスキンの影響を受けたフランスの作家マルセル・プルーストによる北フランスの旅である。「大聖堂」をめぐる近代の知性と感性のコンテクストを文化遺産の歴史に照らして浮き彫りにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化遺産の表象に関わる絵画、版画、写真の展覧会が、フランスではこの10年の間に開催されるようになった。文化遺産がこれまでどのように継承されてきたのかということに関心が高まっている証である。そして2019年4月のパリ、ノートル＝ダム大聖堂の火災をきっかけに、大聖堂の以前の姿が数々のイメージを通して伝えられた。文化遺産への眼差しを問う本研究は、今日の保護・保存のあり方を歴史的経緯を踏まえて問い直し、その意義を再認識するうえで社会的に貢献できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study examines various aspects of the gaze on "the cathedral" from the 19th to the early 20th century. In Europe, "travel" has been deeply associated with the experience of appreciating works of art. Through analyzing texts and images, this study aims to reveal how the value of "the cathedral" was discovered through the gaze of travel and how it was related to the context of society at that time. The analysis focuses on the trip to northern France by John Ruskin, an English art critic, and Marcel Proust, a French writer influenced by Ruskin, from the picturesque tour to the period of tourism. This study sheds light on the context of modern intellect and sensibility surrounding "the cathedral" in the history of cultural heritage.

研究分野：フランス美術制度史

キーワード：大聖堂 旅行 ジョン・ラスキン マルセル・プルースト ゴシック建築 修復 景観 ノルマンディー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

集合的記憶とは、集団が自分たちの過去を再構成して集合的アイデンティティを確立するための知的構造であり、これまでナショナル・アイデンティティを論じる研究が盛んに行われてきた。その関心の流れで、**1980**年代以降「文化遺産」の概念が注目され、フランスの文化財保護制度の成立や修復事業、美術館の誕生について論じられた。近年では、イメージや文学作品に表現される「文化遺産」が**19**世紀の文化的コンテクストの中でどのように生み出されたのかを分析する「表象研究」が行われている。

これまでの「文化遺産」をテーマにした研究では、国民アイデンティティの形成や第三共和政のナショナリズムとの関わりにおいて論じられてきた。確かに、文化財保護は国家による大規模事業であるため、政治的議論は不可欠である。しかし、イデオロギーの分析だけでは、文化遺産が国民にとってどういうものであり、社会に何をもたらしたのかを十分に明らかにしたとは言えない。「文化遺産」がどのように眺められていたかを検討することは、継承の歴史を明らかにすることにもつながり、今日の保護・保存を問い直す意味でも表象研究の意義は高いと考えられる。

本研究は、表象研究によって「文化遺産」をめぐるこれまでの議論に新しい展開として感性や感情のレベルの議論へと広げてゆきたいという意図から着想された。

2. 研究の目的

19世紀は、グランド・ツアーからツーリズムへと、旅のあり方が変化する時代である。こうした大衆化に伴い、旅に関する出版物も変化してゆく。ロマン主義の時代には地方への旅を誘う豪華挿絵本が登場し、やがて小型の旅行ガイドが大量に流通するようになる。テキストとイメージで構成されるこれらの出版物は、当時の学問の発展がもたらす地誌・歴史・考古学の情報を提供し、新しい審美眼によって描かれた都市や建造物の風景を広める役割を果たした。旅が特別なものではなくなるにつれて、旅に出かける画家が増え、スケッチ、水彩画、油彩画が制作された。「大聖堂」をめぐる近代的な知性と感性に関わるコンテクストを浮き彫りにし、これまで見過ごされてきた過去（とりわけ中世）の建築を再発見する眼差しに注目する。

この「研究活動スタート支援」は、「大聖堂は**19**世紀の遺産でもある」という議論の構築を最終目的とする研究の始まりである。**19**世紀は文化財保護制度が確立する時代であるが、文化遺産の問題が、制度や技術だけではなく、感性や感情、さらに記憶に深く関わること、すなわち人文学研究を通して、モノとしての対象を問題にするだけでなく、ヒトとの関わりを問うものであることを改めて示したい。

3. 研究の方法

本研究は、フランス国立図書館(BNF)、フランス国立美術史学院(INHA)、建築・文化遺産センター・メディアテークにおいて、旅と歴史的建造物に関わる**19**世紀の出版物（挿絵入本、雑誌、ガイドブック）作家・芸術家・美術批評家・考古学者・美術史家による旅案内や旅日記、といった一次資料の調査や、北フランスの都市（ルーアンとアミアン）とその近郊における聖堂、美術館、アーカイブを訪問し、中世建築のイメージに関する一次資料の調査を予定していた。しかし、**2020**年に始まった新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により渡仏は不可能となった。したがって、自宅にて上記の研究機関がオンライン公開する一次資料を入手することで研究を進めた。今回実現できなかった一次資料調査は、次の科研プロジェクトに見送る。

本研究は、**2**つの国際シンポジウムでの発表を軸に研究を進めた。ひとつめは、**2019**年**11**月**9-10**日、名古屋大学で開催された国際シンポジウム「ラスキンとフランス(Ruskin et la France)」であり、ランカスター大学(英国)が公開する『ラスキン全集』を入手することにより、ラスキンのフランス旅行に関わる著作物や手記、中世建築に関する著作物や論考、ラスキンが刊行したガイドブックを分析した。さらに、ラスキンが訪れた**19**世紀半ば頃のルーアン大聖堂とアミアン大聖堂の状況に関して、現地調査の代わりにインターネットを駆使した資料収集を行った。また、幸いなことに、ラスキン関連の研究については、「ラスキン文庫」を利用することができた。

二つめは、**2021**年**5**月**15-16**日、日仏会館主催によってオンラインで開催された国際シンポジウム「プルースト：文学と諸芸術 (Proust, la Littérature et les Arts)」である。プルーストのノルマンディー地方の旅を当時の旅行ガイドに従って再構築し、小説のなかの教会堂描写の分析を通して、作家の建築への眼差しを考察する予定であった。ルーアン大聖堂と近郊の現地調査ができなかったため、プルーストの『失われた時を求めて』における教会堂訪問エピソードの分析、それに関わる草稿研究の成果を参照し、**19**世紀の文化遺産の歴史的な文脈と作家の眼差しがどのように関わるのかについて検討した。発表および論文執筆のための文献調査については、一次資料は入手できず、二次資料はすべてインターネットを通して入手した。

4. 研究成果

本研究の主たる成果は、上述した**2**つの国際シンポジウムの発表および論文の内容である。

(1) ジョン・ラスキンは、生涯にわたって旅をした美術批評家であった。イギリスでは上流階級のグランド・ツアーの伝統があるが、ラスキンは、ピクチャレスク・ツアーを始めた中流階級の出身であり、伝統的な旅に新しい傾向を結びつけ、その後のツーリズムへと橋渡しするような存在であった。ラスキンの旅に関するテーマでは、キース・ハンリーの研究成果(Keith Hanley and John K. Walton, *Constructing Cultural Tourism: John Ruskin and the Tourist Gaze*, Bristol, 2010, etc.)を参照した。本論文が取り上げたのは、北フランスの旅である。彼がいつ、どの町を訪れ、何を見物したのかを明確にし、当時の歴史的建造物がどのような状態にあったのかを知ることで、旅が彼の思想にもたらした影響について、その著作や論考を通して検討した。ラスキンの北フランスの旅については、シンシア・J・ガンブルの研究成果(Cynthia J. Gamble, Matthieu Pinette et Stephen Wildman, *Ruskin, Turner. Dessins et voyages en Picardie romantique*, 2003)から情報を多く得ることができた。

本論文は、旅を通してラスキンのゴシック建築への眼差しを明らかにすることを目的としているが、なかでも重要視したのが、第二帝政期のフランスで行われていた歴史的建造物の大修復をラスキンが実際に見ていたということである。ラスキンは『建築の七燈』(1849年)第5章「記憶の燈」での修復批判が有名であるが、その主張が彼の実体験に基づくものであったこと、さらに1854年の「クリスタル・パレスの開幕に寄せて」と題するパンフレット記事のなかでも、フランスにおける修復の問題を再び取り上げ、保存理念や制度を提唱することで一層踏み込んだ主張を展開したことを指摘した。つまり、北フランスの旅は、ラスキンにとって歴史的建造物の修復の問題と真剣に向き合う契機となり、今日の保存理念に通じる考察への道筋を準備したと言える。

もうひとつ取り上げたのは、ラスキンが晩年に執筆した『アミアンの聖書』であり、この著作を「旅行ガイド」として再検討することである。美術批評家が、旅行中にアミアン大聖堂を訪れた際に、何に注目し、どのように見るように読者に促しているのかという視点から分析することで、ラスキンの眼差しを明らかにした。ラスキンはツーリズムの時間を節約した旅を批判し、「文化観光」を提唱したことがすでに指摘されており、『アミアンの聖書』はまさにそうした旅のあり方を示すガイドブックである。大聖堂をじっくり見ることを通じて、ラスキンの眼差しが大聖堂への美学的、美術史的な関心ではなく、彼が1850年代以降育んできた社会思想への関心に裏打ちされていることを読み取った。修復を批判するだけでなく、近代社会において大聖堂とはどのような存在意義があるのか、ラスキンは新しい見方の可能性を示唆していると結論づけた。

(2) マルセル・ブルーストを取り上げて、本研究のテーマである「大聖堂と旅」の考察を深めた。ブルーストの20世紀初頭ノルマンディー地方の旅における遺産への眼差しについて、小説の完成稿と草稿テキスト、モデルとなった絵画・版画の分析を通して考察を行った。ブルーストと大聖堂についてはこれまで充実した研究成果の蓄積があるが、今回は近年刊行された論文集(*Proust et les «Moyen Âge»*, 2015)を参照したうえで、「旅」という視点を導入して考察を試みた。

ブルーストの旅における教会堂への眼差しを、同時代の美術史家や美術批評家の言説と比較しながら、ヴィオレ＝ル＝デュックの修復、近代都市における古いもの、古い石の美学、という3つのテーマに整理して検討した。ブルーストが小説のなかで描く教会堂の場面は、コンプレー(子ども時代)、バルベック(青年時代)があるが、とりわけ主人公の眼差しが当時の学問的動向や美学的潮流の影響を受けながら展開するのは、バルベックの旅においてであった。ブルーストがフランスの大聖堂に興味を抱いたのは、ラスキンの著作がきっかけであることはよく知られていることである。これまでの研究成果をもとに、作家が第二帝政期の修復をどのように考えていたのかを検討した。ブルーストが修復をめぐるラスキンとは異なる見方を示していたことはすでに指摘されており、小説のなかの教会堂訪問のエピソードにおいて、印象主義に通じる眼差しを示唆していることを改めて確認した。

さらに、ブルーストが参照していたと考えられるイメージを調査した。19世紀に描かれた大聖堂のイメージ群(絵画や版画)が作家の眼差しの形成と深く関わるものであることを示すことができた。これまでブルーストとターナーや印象主義絵画との関連性については度々論じられてきたが、本研究では、作家がラスキンの著作を読んでいたことを踏まえて、もうひとつの可能性を示した。ブルーストが教会堂を描写する際、ラスキンがターナーと並んで高く評価したと言われるサミュエル・ブラウトのデッサンの影響を指摘した。さらに、コンプレー教会堂の描写を、ラスキンによる「ピトレスク」の解釈をめぐる議論と重ねて分析することで、20世紀初頭のブルーストにロマン主義の時代に版画を通して広がった「ピトレスク」の概念が継承されているのではないかと論じた。ブルーストの眼差しを「ピトレスク」の観点から論じるのは、新しい試みではないかと思われる。

ブルーストの眼差しは、修復された歴史的建造物は価値がなく美しくないのか、文化遺産の価値は国民のアイデンティティ以外に考えられないのか、といった問いを投げかけるものである。さらに建築単体ではなく、都市景観との関わりを捉えている点においても、文化遺産の歴史において極めて示唆に富んだ問題意識を内包していると考えられる。

(3) 最後に、本研究を通して得られた新しい知見として、サミュエル・ブラウトという今で

はほとんど知られていない画家を挙げる。建築の描写を得意としたイギリスの水彩画家は、ラスキンとプルーストの考察を通して、両者をつなぐ存在として浮上してきた。プラウトはピクチャレスク・ツアー時代の画家であり、勤務先大学の学内研究費によって考察を進めてきた『古きフランスをめぐるピトレスクでロマンティックな旅』(1820-1878年)の「ピカルディー」の巻にデッサンを提供していることが判明した。さらに、イギリスで誕生した「ピクチャレスク」が、フランスでは「ピトレスク」となり、この概念が19世紀フランスでどのように展開したかという新たなテーマが、プルーストの考察を通じて見えてきたことも報告する。

国際シンポジウムの成果は日本語とフランス語で執筆し、日本語は刊行済みである。フランス語論文はすでに執筆を終え、フランスで刊行されるシンポジウム論文集のなかに以下のタイトルで掲載される予定である。

« **Ruskin et la cathédrale d'Amiens : découverte, restauration et guide touristique** »

« Le regard de Proust sur le patrimoine : à propos de quelques églises dans la **Recherche** »

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 泉美知子	4. 巻 128
2. 論文標題 19世紀の大聖堂と旅：ジョン・ラスキンと北フランス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中央大学文学部紀要（言語・文学・文化）	6. 最初と最後の頁 85-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 泉美知子
2. 発表標題 「ブルーストの遺産への眼差し：『失われた時を求めて』における教会をめぐる」
3. 学会等名 国際シンポジウム「ブルースト：文学と諸芸術」（日仏会館主催、オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 泉美知子
2. 発表標題 Ruskin et la cathedrale d'Amiens : decouverte, restauration et guide touristique
3. 学会等名 Colloque international, Ruskin et la France
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 泉美知子「ブルーストの遺産への眼差し：『失われた時を求めて』における教会をめぐる」(225-244頁)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 377
3. 書名 『ブルーストと芸術』（吉川一義編）	

1. 著者名 泉美知子「文化遺産としてのキリスト教」	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 『キリスト教文化事典』（キリスト教文化事典編集委員会）	

1. 著者名 ソフィー・デュヴァル（泉美知子訳）「 ” 二つの教えの神秘的な合致 ” エステルと《コンコルディア》」（245-265頁）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 377
3. 書名 『ブルーストと芸術』（吉川一義編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------